

茨城が生んだ経済人の巨星

土浦方面に向かう国道6号を水戸市吉沢町の「警察学校入口」交差点で左折し、県道50号を進む。「涸沼大橋」を渡り、茨城町海老沢地区内の郵便局を過ぎて、右手の細い道を登ると、右手畑の奥に大きな碑が建っている。

「川崎翁招魂碑」と書かれている。明治から昭和初期に隆盛を極めた旧財閥のひとつ、川崎財閥の基礎を築いた初代川崎八右衛門(以下八右衛門と略)の顕彰碑である。

八右衛門は天保5年(1834)、常陸国鹿島郡海老沢村(現東茨城郡茨城町)に生まれた。川崎家は廻船問屋を営み、当時の物資輸送を支えた。また、代々水戸藩の山を守る役人や村役人を務めた名家でもあった。

嘉永2年(1849)、16歳の時に家を相続し、八右衛門を襲名。翌年、水戸藩領内の成沢村(現水戸市)で「日新塾」を開いていた加倉井砂山の門を叩く。日新塾は全国から入門者を受け入れ、文武両道にわたる学問を教授していた。

砂山に才能を見い出された八右衛門は、砂山の二女舞子と結婚。文久3年(1863)には、水戸藩の財政立て直しのために、新銭の铸造を申し出た。

この案が認められ、八右衛門は水戸藩勘定方役人に採用。幕府への説得も成功し、慶応2年(1866)、水戸藩江戸小梅屋敷で新たな通貨の製造が始まった。

実績を積み重ねた八右衛門は、明治の世になっても頼られた。『茨城町史・通史編』は「明治五年には、旧水戸藩常平米五三七〇俵の処分を一手に引き受け」と記述している。

明治7年(1874)には、東京・日本橋に「川崎組」を創設、警視庁の公金を取り扱い始めた。この川崎組こそ、後に日本八財閥のひとつと謳われた川崎財閥の基礎となる組織である。

その後「八年には千葉県と同取扱を、一二年から三井組にかかわって茨城県の同取扱も引きうけた」(『茨城町史・通史編』)。

川崎八右衛門

Kawasaki Hachimon

明治13年(1880)、八右衛門は、川崎組を川崎銀行と改め、頭取の座に就いた。日本を代表する私立銀行の誕生である。翌年には日本初の貯蓄銀行となる東海貯金銀行を創設した。

こうして財を成した八右衛門は、現在のJR水戸線にあたる鉄道を敷設した水戸鐵道(現東日本旅客鉄道)に資金を提供。また、入山採炭会社を設立し炭鉱事業にも乗り出した。こうして、川崎銀行を中心に川崎財閥の基盤が形成されていった。

川崎財閥の発展は、八右衛門の三男金三郎(二代目八右衛門)に引き継がれた。金三郎は、明治26年(1893)、川崎銀行の頭取に就任後、明治39年(1906)には、念願であった当時の日本火災保険を買収した。

また、同年、直系会社統率のため川崎定徳会を設立。昭和初期、傘下の銀行や企業は総勢26社にのぼったとされるが、第二次世界大戦後の財閥解体で他の財閥同様、解体された。

しかし、「川崎翁招魂碑」の碑文に刻まれているように、八右衛門は茨城が生んだ経済人

の巨星であり、「昭代の一偉人と謂うべし」である。(文中敬省略)

主な参考文献  
『茨城町史・通史編』(平成7年、茨城町発行)。『茨城町史 地誌編』(平成5年、茨城町発行)。『水戸の先人たち』(平成22年、水戸市教育委員会発行)。



涸沼川右岸高台の林の中に建つ「川崎翁招魂碑」  
=茨城町海老沢(筆者撮影)

偉人から読み解く「独力経営」

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一